第30回ＮＩＥ全国大会 神戸

新聞を学校の授業で活用するＮＩＥ（教育に新聞を）活動について考える「第30回ＮＩＥ全国大会」（日本新聞協会主催）が7月31日から2日間、神戸市で開かれた。今年の大会スローガンは「時代を読み解き、いのちを守るＮＩＥ」。記念講演やパネルディスカッションのほか、公開授業や実践発表が行われ、全国から教育関係者ら約1800人が参加した。

命守る力 新聞から気づき

＊ パネルディスカッション

報道の空白

池上　昨年の兵庫県知事選は衝撃的な結果となった。まずは、知事選、今年7月の参院選について、メディアはどう受け止めたのか。学校教育では、どう受け止めたらいいのか、というところから始めたい。

古田　人は皆、バイアス（偏り・先入観）を持っている。間違った情報を「間違っている」と認識するのは難しい。自分の価値観に近いものを良いメディア、正しい情報だと思いがちだ。

長沼　知事選では中立性、公平性を意識したため、報道の空白が生じた。質、量ともに十分な発信ができなかった反省と教訓に基づき、参院選ではファクトチェック（情報の真偽検証）に取り組んだ。

渋谷　昨年、授業で衆院選の模擬選挙を行った。子どもたちからは、「新聞やテレビを見て情報を得たかったのに選挙が始まったら、なくなった」「実際に候補者の話を聞きに行ったら、何かSNSと違う」という感想もあった。

阪本　情報が入らない「空白域」は災害でも多い問題。直後はSNSの情報が早い。時間がたつと、きちんと調べた情報やデータをまとめて紹介してくれる新聞に強みがあると思う。

情報源使い分け

池上　大きな災害が起きると、誤情報、いたずらのレベルから、金もうけをしようとする動きまで様々なことが起きている。それにだまされないようにするには、どうしたらいいのか。学校で生徒たちに、どんな力をつけさせていくのか。

渋谷　（7月30日に発生した）ロシア・カムチャツカ半島付近での地震後、どうやって情報を得た生徒に緊急アンケートをした。テレビ、SNS、防災無線などが多く、逃げる準備をしたが、調べてみたら、まだ大丈夫だとか、なぜ注意報が出たのかを即座に調べたという子もいた。普段から正しい情報をどう得るのか、SNS、新聞、テレビを使い分ける力をつけていくことが重要だと思う。

阪本　阪神・淡路大震災からは、揺れに備えるだけでなく、復旧・復興までの取り組みや被害を減らす「減災」を大事にしなければならないことを学んだ。建物の耐震化が進み、ソフトが整備されても、それを使いこなす人のリテラシー（読み解く力）が大切だ。

古田　誤情報というとSNSを思い浮かべるが、拡散方法で圧倒的に多いのは口コミ。しかも善意で広がっている。「発信源」「根拠」「関連情報」の三つを確認してほしい。「発信源」は誰か。その情報を知りうる立場か。「根拠」はあるか。「その情報を知りうる人物や組織は何を発信しているのか」ということだ。

池上　さて、最大のテーマは「どうやって私たちの命を守っていくのか」。健全な社会を作っていくには、どのような取り組みが必要で、ＮＩＥはどんな役割を果たすのか。課題は。

阪本　災害は繰り返し起きている。過去の災害から学ぶことが重要だ。100年前の地震被害など紙媒体でないとたどれない記録はまだ、たくさんある。変わらずに伝えるうえで新聞は大事な役割を担っている。

渋谷　生徒たちは、新聞を通じて社会課題を知ることで、人間の幅が広がっていく。いかに自分事として捉えることができるかが鍵となる。

吉田　今、みんなが知りたがっているのは、ちゃんとした情報を得る方法。それは新聞を読むだけでは身につかない。これからは、ニュース・イン・エデュケーション（教育にニュースを）」なのではないか。

長沼　新聞の最大の武器は組織力、ネットワークを生かした丁寧な取材によるファクト（事実）の積み上げだ。事実とそうでないことを示し続けることが新聞社の役割だと考えている。その強みを生かすためにも、新しい情報の届け方を工夫する必要があると思う。

池上　大学で教えていて、ニュースを理解すると面白いということを学生に体験させると、いろんな広がりがある。小中学生でも取り組めるのではないか。伝える側には、正確な事実をどのようにして人々に広く早く伝えるか、そのためには何が必要なのかを改めて考えることが求められている。

阪本真由美さん

古田大輔さん

池上彰さん

長沼隆之さん

渋谷仁崇さん

【司会】ジャーナリスト　池上彰さん
【パネリスト】
日本ファクトチェックセンター編集長　古田大輔さん
兵庫県立大大学院減災復興政策研究科教授　阪本真由美さん
西宮市立浜脇中学校主幹教諭　渋谷仁崇さん
神戸新聞社論説副委員長　長沼隆之さん

＊ 記念講演

誰もが発信 見極めは自分

芥川賞作家　小川洋子さん

おがわ・ようこ　岡山市出身。早稲田大卒。1991年に「妊娠カレンダー」で芥川賞を受賞した。同賞選考委員。兵庫県西宮市在住。

芥川賞作家の小川洋子さんは「言葉は人をつなぐ」をテーマに記念講演した。インターネットやSNSで誰もが簡単に発信できる時代になった一方で、誹謗中傷や真偽不明の言説が飛び交う。小川さんは「スマートフォンでみんなが好きな時に世界中に発信できる時代。『いいね』をたくさんもらい、認めてほしいと考えている。新しい機械が出てきたがゆえに、これまで育んできた言葉と人間の関係が劇的に変わってしまった感じがする」と語った。

7月30日、カムチャツカ半島付近を震源とする地震が発生し、津波情報が発表された。「命が危ない事態になった時、その情報が信用できるかを自分で判断しなければいけない」と指摘。ネット上には偽画像も流れ、「感わされて拡散すると、加害者にも被害者にもなりうる。人間のためを思って発明したことが人間を混乱させている」と訴えた。

講演では、西宮市立浜脇中学校の新聞を使った授業を見学したことを紹介。生徒が気になる記事を切り抜いて意見を発表し、他の意見を聞いて考え直す様子を見て、「新聞を読むだけで、こんなに活気づくのだと実感した」と振り返った。そのうえで、「スマホの情報は自分に無関係だと通り過ぎてしまう。新聞は広げると、視界の隅に小さな記事が引っかかる。読んでみると案外、関わりがあったことや気づきを与えてくれる」と強調した。

被害者、加害者にならない

＊ 基調提案

大会実行委員長で、神戸親和大教授の竹内弘明さんは基調提案を行った。

今年を「阪神大震災から30年、戦後80年の節目」と位置づけ、「震災の教訓や平和の尊さを伝えること、情報過多の時代に正確な情報を収集する大切さ」に触れた。

ＳＮＳ上であった災害時の虚偽の救助要請や誹謗中傷が人の命を奪う可能性を指摘し、「子どもたちが（情報の）被害者にも加害者にもならないように、情報を取捨選択し、活用する能力・メディアリテラシーを高めることが必要だ」と訴えた。

大会スローガンには、「ＮＩＥを通し、いじめや事件事故、災害、戦争などあらゆる困難を乗り越えていく力をつけ、人の命に思いをはせてほしいと願いを込めた」と語った。

行成晴司、藤沢一紀、辻井花歩、八木良樹が担当しました。

読み手に届く 書き方を工夫

＊ 実践発表

愛媛学園小学校（神戸市垂水区）の彦野周子教諭と同学園中学・高校（同）の広畑彰久教諭は「中学3年生と小学6年生が伝え合う写真を紹介し合った。彦野教諭は「戦後80年を迎えて戦争体験を持つ人が少なくなっている。中学生の言葉を通じて、小学生は命の重みを感じた」と報告した。

同学園は中学生が学んだことを自作の新聞にまとめ、小学生に伝える授業を実施している。新聞の読み手に伝わるように書き方を工夫する過程で、学習内容への理解が深まるという。

中学3年生は、生後8か月の時に広島県で被爆した女性から体験と平和の大切さを聞いた。その後、修学旅行で広島平和記念資料館などを見学し、戦争の記憶を継承する人からも話を聞いて新聞作りに取り組んだ。

小学6年生は、戦争や原爆投下に関する新聞記事を読んだ後、印象深い記事、写真を紹介し合った。彦野教諭は「戦後80年を迎えて戦争体験を持つ人が少なくなっている。中学生の言葉を通じて、小学生は命の重みを感じた」と報告した。

推し記事紹介 思考深める

＊ 公開授業

甲南小学校（神戸市東灘区）は、児童約30人が新聞を紹介して最も読みたくなる記事を投票する授業「シンプリオバトル」を披露した＝写真＝。

発表は3～4人のチームに分かれて実施した。男子児童は社会人野球の大会を解説する記事を紹介。「東京ドームで開かれているのに、なぜ『大人の甲子園』と呼ばれているのか」と素朴な疑問を語り、「（社会人野球でも高校野球のように）甲子園で勝つのと同じくらいしんどいから」と仮説を立てた。

最も支持を受けた、本と被爆者遺族の記事を紹介した4年米田理乃さんは「新聞は写真もあって、他人の人生について書いてあってよかった。記事を通して戦争を知ってもらえた」とほほ笑んだ。

授業を行った田代弘子講師は「新聞情報を知ると、思考を深められ、世の中を見る視点が変わる。シンプリオバトルは知的好奇心がかき立てられ、友達とコミュニケーションができる取り組み」と胸を張った。